

## 「私」という「カレー」

藤井 彩蘭

「毎日カレーばかりの食事かな？やっぱり空気汚いのかな？友達できるかな？」私はこのような不安を持ちながら、昨年の八月、インドに渡りました。小学校六年生の十二月、お父さんは私とお母さんに「これを見て。」と言って「チェンナイ」と書かれた冊子を見せてくれました。私はてっきり旅行でチェンナイに行くのかと思って、久しぶりの海外旅行だとワクワクしていました。私が冊子を眺めていると、お父さんは「また海外赴任が決まったのだけど、一緒にインドに行く？」とのこと。中学受験を数か月後に控えている私は、その後、自分も海外で生活をするのか、日本で学校生活を送るのかの、葛藤の日々が続きました。チェンナイで学校生活を送るといふ決め手になったのは、志望の中学校に通っていたら経験できないようなことを学べると思ったからです。これは、将来に向けて自分を差別化できるチャンスだと思い、私はインドで家族と共に住むことを選びました。

中学一年の一学期までは、日本の中学校で寮生活を送りました。忙しく充実した日々を過ごす中で、たくさんの思

い出と、友達ができました。テスト勉強は大変だったけど、頑張っていた自分がいて、その頑張りを楽しく感じることさえもありました。日に日に近づいてくるインド出発のことを考えると、行きたくないと思っく日も、時にはありました。そんな時、親友が、「インドに行ってもうちの友情は変わらへんよ。友情に距離なんて関係ないでー！ここじゃ、同じ生活しかできひんやん。毎日この生活を三年間やで？ うちらはいつでも会えるけど、インドでの生活は今しかできひんやろ？それやったらインド行って面白い経験たくさんして、戻ってきたらまた話してくれや！」と、私に言うてくれました。私の中では、インドでの新しい生活については、学習面だけの利益を考えていたので、親友からの言葉は、インドの生活には、異国文化に触れ合う機会が多くあることを、私に気づかせてくれました。

インドに着き、飛行機から降りた時、私は空気の違いに気づきました。匂いが違うのです。そのことにより、私は、一気に不安でいっぱいになりました。自分の中では「大丈夫だ、絶対大丈夫。」と、言い聞かせ友達からもらった手紙を手に持ちながら、心を落ち着かせました。インドといえはカレーの地。今日から私のカレー作りが始まる。そんな意気込みを持ちながら、私は空港から出ました。そこで、

私は、経験が全てスパイスとなり、私は誰もが作れないような「私」という「カレー」を作ると決心しました。

いよいよ学校が始まり、私は現地のインターナショナルスクールに通うことになりました。アメリカ人、韓国人、フランス人、とても国際色豊かな場所であり、楽しみでいっぱいでした。しかし、同時に、緊張でいっぱいだった私は、友達ができるか不安でしかたがありませんでした。以前、私はイギリスに住んでいた経験があったため、それを生かして英語で初対面の子と言葉を交わすことができました。その子が、私の最初の友達です。私は、元々友達作りは苦手な方ではなかったのですが、すぐに周りになじむことができなくなりました。しかし、勉強面で躓くことができました。授業の進み方や分からない単語、まだ習っていない单元など、私は焦る気持ちを持ちながら日々の学習に取り組みました。どこから始めればいいのか分からないことも多く、ここで私は日本とインドの教育の違いを感じました。

日本の中学校では、定期テストなどがあったため、私はテストがモチベーションとなり勉強を進めていました。しかし、インターナショナルスクールには定期テストがほとんどありませんでした。さらに、授業中の態度が日本の中学校では絶対にありえない光景でいっぱいでした。授業中

に飲食、携帯の使用が認められていて、「自由すぎる」と感じました。日本の学校との文化の違いに、初めの一ヶ月ほどはカルチャーショックを受けましたが、自由な面が増えたことは、正直すごく嬉しくて、日本の学校では感じられないような開放感を常に感じることができました。この自由な雰囲気のおかげで、私は自分自身で、学習のスケジュールを考えるようになり、意欲的に学習に取り組めるようになりました。日本の中学校に通っていた頃は、余裕な時間があれば、携帯をいじったり、ダラダラして過ごすことが多かったのですが、現在はその時間を読書に費やせるようになりました。自分から率先して読書をすることは今まで減多になかったため、自分でも驚きました。他にも、調べ物に時間を費やせるようになり、時間を楽しく、有効に使えるようになりました。

このように、学校でのカルチャーショックはたくさんありましたが、友達のおかげですぐに慣れることができました。それよりも、私は、学校以外の日常にもショックを覚えしました。インドに引っ越してからの約四ヶ月、私は車以外での移動がなく、学校以外の外出は、ショッピングモールにしか行っていませんでした。そのような生活環境の中で、初めて外出した日のことを、私は今でも鮮明に覚えて

います。道路には信号もなく、ずっと車やバイクが走っていたため、渡るだけでも一苦勞でした。「空気が悪い原因は明らかにこの排気ガスのせいだろ。」と、思いながら、私はお母さんに付き添い、買い物について行きました。牛や犬、ヤギ、時には人が道路で寝そべっていることもありました。日本では絶対に見られない光景、この一日で私は、一気にインドに対しての興味が湧きました。空気汚染の原因、人々の生活、現地校に通っている子達の生活、同い年のインド人がどのようなことに興味あるのかなど、私は、インドの人々の生活についてもっと知りたくなりました。

十一月、私の学校ではボランティア活動があつたため、自分のしたいボランティア活動を選びました。そこで私は、「現地校に通っている子達と、一緒に遊んで、どのようにして、ストレス軽減や、心を落ち着かせることができるか。」という内容のボランティア活動に参加しました。言葉の壁がある中でも、みんなが楽しめるような企画ができるようにたくさん考えました。私は本当にその活動が楽しみで、企画を考える際も、楽しく取り組めたことを今でも覚えています。実際の活動日の二日間では、チョコレートブラウニーを作ったり、ミサンガを作ったり、鬼ごっこをしたりと、たくさんのアクティビティーを通して仲を深めること

ができました。活動の中で、子供達の満面の笑みを見てみると、自分まで笑顔になり、活動日の最後に、ある子からシールを貰い、とても可愛い笑顔で「サンキュー！」って言うてくれて、「本当に頑張ってよかった！」と、心の底から思うことができました。たったの一言ではあるけれど、その言葉は、私の心にとても響いたのです。ここまで楽しんでくれている姿を見ると、「またこの活動をしたい。」という想いも増しました。この日から、私は外に出かけた時に、誰かと目が合ったら、絶対に笑顔で返したり、手を振られたら笑顔で手を振り返すことにしました。会ったことも話したこともない人ではあるけれど、みんなを幸せにする笑顔の力はすごいと改めて思いました。

私は、チェンナイで生活するようになって、たくさんのことを学びました。学習面ではもちろん、人間性の面でも、たくさんの人と関わることができ、さらに、どんな小さいことであっても、それを幸せに感じられるようになりました。こんなにも楽しい生活をこれからも送れると思うと、本当にわくわくしています。まだまだ、私のカレー作りは続いていきます。